「東寺　空海と仏像曼荼羅」展(6月2日迄)を観る　　2019年4月16日　虎長

通常閉館である月曜日に特別開催の「内覧会」の招待券を手に入れた。1枚で2名入れるので、友人の藤井君と開館の13:00に東京国立博物館を訪れた。「一般客がいないから混雑しないだろう」との予測とは違い、招待客が行列をなして待っていた。普段は 550 円、この日は無料の音声ガイドが不足しないかと思うほどの入場者数だったが杞憂だった。帰りにはアンケートに回答して土産を頂いた。以上が「内覧会」のメリット。下世話なことはこれくらいにして本題に入る。

東寺といえば、列車が京都駅に入る頃に見える五重塔は皆さん御存知。でも、それ以外のことを知らない僕のような人が多いだろう。五重塔は江戸時代建造だが、平安遷都の時期に建立された伽藍で現存するのは東寺のみとのこと。日本史で、「空海と言えば高野山」と暗記させられたが、空海は 806 年(平安遷都は 798 年)に唐から帰国した後、816 年に高野山金剛峯寺を開創、823 年に東寺を賜ったとのこと。以前、醍醐寺展で知ったことだが、密教の理解には造形物が不可欠とのことで、真言宗の寺には絵画、彫刻、工芸品が多く残されている。

第1章　空海と後七日御修法(ごしにちみしほ)

後七日御修法は正月の儀式で、昔は宮中、現在は東寺で行われている。展示には堂内儀式で大々的に並べられる供物（？）が再現されていた。優れた書家である空海が最澄にあてた手紙、「風信帖(ふうしんじょう)」(Fig 1)が展示されていた。漢字ばかりで、何が書いてあるか僕には分からなかったが、説明によれば、「そちらへなかなか訪ねていけないが、こちらにいらしてほしい」と書き出している由。なお、天台密教は「台密」、真言密教は、東寺の名前を使い「東密」というそうで、東寺が根本道場として重要なことが分かる。展示された密教法具の現物は Fig 2 の写真程には金ピカではないが、唐時代 9 世紀のもので、驚くなかれ、今も法会に使われている「現役」という。

絵画では、1枚に1神仏を描いた、かなり大きな「十二天像」「五大尊像」があったが、ここでは一例だけ、**降三世明王**(ごうざんぜみょうおう)を Fig 3 に示す。平安末期のものだが保存状態はよい。

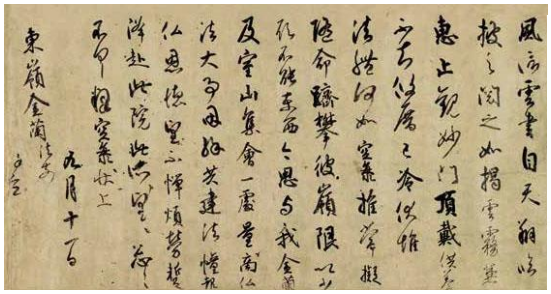

Fig 1　風信帖

Fig 2 金銅密教法具

Fig 3　降三世明王

第2章　真言密教の至宝

山水屏風としては最古（平安時代 11 世紀)のものが展示されていた。寺院より貴族の館を飾るのにふさわしいと思われる。絵のテーマは中国風だが日本製である。曼荼羅では、保存状態のよい西院曼荼羅が展示期間でなく残念。展示された両界曼荼羅(甲本)は保存状態がよくないのでここには示さない。
会場で曼荼羅の描き方(神仏の配置の仕方)がビデオで説明されていたのはよかった。これまで僕は曼荼羅を、何かごちゃごちゃと描いたタピスリーのように感じて、じっくり観賞したことがなかった。

1) まず、神仏の配置にハイアラーキーと規則があることを知った。位が高い順に、阿弥陀、如来、明王、天と 4 グループあり、それぞれがグループ長を含める 5 体から成る。リーダー以外の 4 体には夫々東西南北が割り当てられている。
2) 曼荼羅はサンスクリット語で「まんだ=真理」と「ら=そこにある」を組み合わせた「真理がそこにある」という意味。「まんだ」には「円」の意味もあるそうで、それかあらぬか絵画の場合は神仏が円の中に描かれ、位の高いものが中心に、位が低くなるにつれて、放射状に中心から離れて描かれる。
3) 壁掛けだけでなく、床に敷く「敷曼荼羅」もあり、彫像による「立体曼荼羅」もある。仏像を描く代わりに古代インド文字(種子という)で神仏を表した種子曼荼羅もある。
4) 両界曼荼羅には胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅があり、両者では大日如来を除く 4 体の如来名が異なる。

第３章　　東寺の信仰と歴史

灌頂会の行列や舎利会という行事の行列に用いられる、種々の仮面(Fig 4)にはリアルな顔、現代的な顔、ユーモラスな顔があり、興味深かった。
女神座像(Fig 5)は仏像を真似た神像ができていく過渡期のものとの印象をもった。女神の名前は分からなかった。

Fig 4　十二天面の一部　　Fig 5　女神座像　　Fig 6　兜跋(とばつ)毘沙門天立像

本展は左会場と右会場に分かれており、第 1 章～ 第 3 章の大部分が左、第 3 章の最後の部分と第 4 章が右に展示されている。左会場ではぐれてしまった藤井君が中央の休憩ソファに座っているのが見つかった。既に右会場も観たとのことだが、もう一度、僕に付き合ってくれるという。感想を話しあいながら観てまわったので楽しかった。右会場冒頭で強烈なインパクトをあたえたのは、兜跋毘沙門天立像(Fig 6)。これは日本風でない。唐代 8 世紀に造られ腰が高い細身のスタイルと、中央アジア風の甲(よろい) が特色。通常踏みつけられる鬼が手で毘沙門天をささえているのもおかしい。

第 4 章　曼荼羅の世界　①

ここには敷曼荼羅、種子曼荼羅も展示されているが、なんといっても見ごたえのあるのは五大虚空蔵菩薩坐像と、五大虚空蔵菩薩は唐代 9 世紀のもの、Fig 7 では横並びに写っている

が、展示では 4 体が東西南北を向き、馬に乗った法界虚空菩薩 が中央に位置している。インド風の雰囲気が残っていると感じた。左端の菩薩が乗っているのは唯一の空想上の動物・鳥ということなので、ガルーダかと推測したら、その通りだった。ガルーダはインド神話に出てくる、インドネシア航空の名前になっているし日本の神社の鳥居の原型ともいわれる。

Fig 7 五大虚空蔵菩薩

Fig 8
金剛虚空蔵菩薩(左)
法界虚空蔵菩薩(右)

第 4 章　曼荼羅の世界　②　立体曼荼羅

Fig 9 立体曼荼羅　この写真は展示物をすべてカバーしているが、大きさは実物を反映していない。

1)　展示場の奥の壁よりには金色の如来像 4 体(中心の大日如来は欠席で壁に写真展示)　Fig 9 の円の上。
2)その手前の展示が金剛菩薩 4 体(金剛波羅密菩薩が欠席)　Fig 9 の円の下。
3)更に手前の展示が明王 4 体(欠席の不動明王は壁に写真展示)　Fig 9 の上両端(大威徳明王と金剛夜叉明王) と下両端 (軍荼利明王と降三世明王)。
4)一番手前の展示が天 2 体(多聞天=毘沙門天、広目天が欠席)　Fig 9 の中段両端(増長天と持国天)と最も大きく写っている座像(帝釈天)。

東寺の総数 21 体の中 15 体が運ばれて展示されていた。如来 4 体が江戸時代のもので重要文化財、他の 11 体は平安時代のもので国宝である。

1)だからという訳ではないが、如来像(宝生如来、阿弥陀如来 はのっぺりして、それほど感動を呼ばない。4 体とも同じようで区別がつかない。館内説明にも「見分けがつくのは手の組み方だけ」とあった。

2)金剛菩薩像（金剛宝菩薩、金剛法菩薩、金剛業菩薩、金剛薩埵菩薩）は全体の中で最も小柄。 当然静的である。如来像ほどではないが、どれも似ている。如来像も菩薩像も今は蓮華座に座しているが、当初は動物の上に座していた可能性もある、という。

Fig 10 大威徳明王騎牛像

後ろ左右は写真で代理出席の夫々不動明王と大日如来。

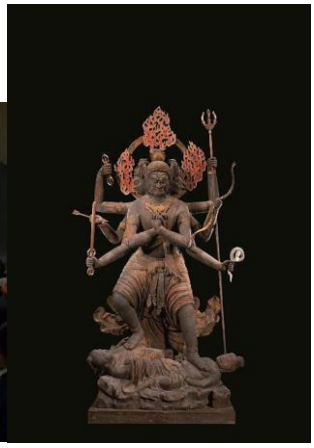

Fig 11 降三世明王立像

3) 大威徳明王は騎牛像だが、他の 3 明王は立像。どれもインドの神を借用しているようだ。それも多面多臂である。「八面六臂の活躍」という言葉があるが、帰宅後調べたところ、「仏像に八面は存在せず、活動範囲を広げる意味で八面の言葉が生まれた「」という。しかし大威徳明王は首回りの三面の他、冠に小さな複数の面を貼り付けている。「八面はない」というのは首周りの面の数で、冠周りの面を勘定しない場合の事だろう。「臂」とは手か腕のことかと思ったら、「肘」のこと。では足は？「足」という。

Fig 12 増長天立像　　Fig 13 持国天立像

Fig 14 帝釈天騎象像

4) 増長天の重量感と持国天の躍動感に感動した。鎌倉期でなく平安期でも、こんな男性的な迫力のある仏像があったのだ。一体が一材から彫りだされていることが驚き。さて「天」のリーダー格帝釈天はゆったりと象に乗り、凛としている。藤井君は「人間的な顔だな」と言ったが、その通りで、しかも現代的なイケメンである点が他の「天」と異なる。本展で唯一、写真撮影が許されたのが、この帝釈天であり、本展の呼び物である。

以上